

2017年 小学校の部 最優秀賞

止まった時計を動かすため

広島県広島市 安田小学校6年生

杉田 幸穂（すぎたしほ）

この七十二年間、ほとんど雨が降った事のない八月六日。あの原爆が落ちた日も快晴だった。八時十五分、上空六百メートルでさく裂した原子爆だんに、無抵抗な三才の子も八十才の老人も男も女も関係なく命をうばわれた。息する人々の肌は焼けただれ、「水をください。水をください。」と言いながら川に飛び込む人々。まさに地獄だ。

戦争で親せきを無くした祖母が、広島で生まれて十一年間、一度も平和資料館へ行ったことのない私に、この本を薦めてくれた。「怒りと絶望からうまれる許す心。」私が、原爆で家族を亡くしたら、絶対に許せない。しかし、この本を読み進めるほど少しずつ私の考えが変化してきた。進示と父が大傷を負って歩いた栄橋。私は日常何気なく通っている。そんな身近な場所が傷ついた人々に埋め尽くされ、川には無数の死体がういていたなんて、想像するだけでも身震いした。また、焼け野原となった町を、自らも傷ついているのに、息子を励まし、冷静な判断を持って生きる勇気を与え続けた父は、なんて偉大なんだろうと思った。

一番心に残った事は、進示が歩き回ってやっと見つけた父の形見、懐中時計を国連へ寄付した場面だ。きっと進示は、偉大な父の時計。父をうばった時刻で止まった時計。自ら傷つきながらも、けん命に自分をはげましてくれた父の時計を手元に置いておきたかっただはずだ。しかし原爆が落とされた時間を最後に、時を刻む事を止めた針の意味を、世界中の人に知ってもらいたいと思ったはずだ。けれど、そんな気持ちが盗難という形で裏切られた。本当は、許せない気持ちだったはずだ。しかし、進示は、この父の言葉を思い出して許した。「人を憎んだらようない。何かをなくした時は、何かを得る時だ。」という言葉だ。

戦争の悲惨さは体験した者にしか分からない。本当に分かってもらいたかったら、相手と同じ目に合わせてやらなければいけない。でも、その方法だと戦争は繰り返され、悲惨な思いをする人が地球を埋め尽くす。だれかが勇気を持って、「許す」事をしなければ、悪の連鎖は止まらない。この本の登場人物も広島の人々も、私には到底想像もつかない悲惨な状況の中から、かっとうの末、「許す心」を語り、たった七十二年で広島をここまで明るく立派に復興させたかと思うと、感謝と何ともいえない気持ちで涙が止まらなかった。

今年の夏、平和資料館で現実を受け止め、ショックを受けている私の前に、建物も何もない白黒の写真が現われた。その中に一輪の花が咲いていた。カンナの花だ。白黒なのに赤く見えた。カンナの花は、原爆で突然命をうばわれた人々の、「もっと生きたかった。」という強い思いを表す真っ赤な血の色だと思った。七十五年は草木が生えないといわれた

広島の人に勇気と希望をもたらしたにちがいない。

今年、私の小学校は、ひばく建物の旧日本銀行で開かれるカンナプロジェクトに参加した。世界共通の音楽を使い、自らの手で作詞作曲して、カンナの歌を合唱した。一つ一つの音色が一人一人の世界平和につながる様、夢と希望の光となって届く様、一生懸命歌った。

私もいつか、カンナのように希望や勇気を人々に届けられる立派な人になりたい。そして、広島の人々は今までと変わらず、「許す心」を持って世界平和を願い続ける。止まった懐中時計を動かすために。